

ハイデルベルク信仰問答より

問 80 主の聖餐と教皇のミサとの間に、どのような違いがありますか。

答え 主の聖餐は十字架の上で、ただ一回だけ、主ご自身が成就されたイエス・キリストの唯一の犠牲によって、私たちのすべての罪の完全な赦しを得ていることを、私たちに証しているのです（それは聖霊によって、私たちはキリストと一体にされる、主は今も天なる父の右におられ、そこで崇められるということ私たちに証している）。ところが、もしキリストが、司祭によって日々新たに、彼らに差し出されるのでなければ、キリストの苦難によっては、生ける者も死せる者も罪の赦しを与えられない、とミサは教えています（それはまた、キリストが肉体的に、パンとぶどう酒の形のもとにおり、それゆえ、その形において崇められるべきである、と教えています）。したがって、ミサは根本的に、ただ一回限りのイエス・キリストの犠牲と苦難の完全な否定なのであります（それは呪わるべき偶像礼拝なのであります）。

本書の日本語訳は 1971 年に第 1 版が出版されましたが、そこでは問 80 の最後に以下のような添書きがあります。

「この問いは、第二版ではじめて、部分的に公にされた。括弧の中の部分は、第三版で加えられた。」

更に、その脚注ではこのようにも書かれています。

「第二版でミサが有罪であるとするように選帝侯から命じられたが、その時は明確な形をとらず、第三版で明らかとなり、第四版で現在の形をとった。それは、1562 年 9 月のトレント総会議が、『ミサの犠牲』を肯定したことへの抗議の表明であった。」

原典の初版では問 80 は入っていなかったのですが、これが書かれた時代にカトリック教会との厳しい論争があったため、リフォームドとカトリック教会の立場を論ずる必要が出てきたのです。尤も、現在のカトリック教会の聖餐理解は当時とだいぶ違っており、プロテスタントの考え方に近づいてきていますから、基本的に「当時避けて通れなかった論争」という視点で読むべきでしょう。

ここで問題とされているカトリック教会の「教皇のミサ」の考え方によると、その祭儀の度ごとにキリストの犠牲がささげられているとされています。教皇（司祭）がささげる犠牲の行為によって、キリストの十字架の犠牲が真に成就されるというのです。つまり、司祭は祭壇において毎回キリストを犠牲としてささげているということになります。

この考え方に断固として反対したリフォームドの立場の人々は、その根拠をヘブル書の諸々の箇所求めました。

この方は、大祭司たちのように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために、毎日いけにえを献げる必要はありません。ご自身を献げることによって、ただ一度でこれを成し遂げられたからです。(ヘブル7:27)

雄山羊や若い雄牛の血によってではなく、ご自身の血によってただ一度聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。(ヘブル9:12)

それも、毎年自分のものでない血を携えて聖所に入る大祭司とは違い、キリストは、ご自身を何度も献げるようなことはありません。もしそうだとすれば、天地創造の時から、度々苦しまねばならなかったはずで。ところが実際は、世の終わりに、ご自身をいけにえとして献げて罪を取り除くために、ただ一度現れてくださいました。そして、人間には、ただ一度死ぬことと、その後裁きを受けることが定まっているように、キリストもまた、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、救いをもたらすために、ご自分を待ち望んでいる人々に現れてくださるのです。(ヘブル9:25-28)

これらの箇所では、主イエスが「ただ一度」ご自分を犠牲としてささげられたことが強調されています。この完全な犠牲は、二度と代わりが必要でないほど十分に神の怒りをなだめました。もし更に犠牲が必要だと主張するならば、キリストの十字架の贖いは不完全であったということになります。

このことを元に、カトリック教会で行なわれている「犠牲としてのミサ」は一時的なキリストの犠牲の意味を無効にしてしまっていると非難しているのです。

ところが、もしキリストが、司祭によって日々新たに、彼らに差し出されるのでなければ、キリストの苦難によっては、生ける者も死せる者も罪の赦しを与えられない、とミサは教えています。

したがって、ミサは根本的に、ただ一回限りのイエス・キリストの犠牲と苦難の完全な否定なのであります。

こうなってくると、司祭に与えられた権限はとてつもないものとなってしまいます。キリストの犠牲を罪ある人間が成就するという話になってくるのです。実際のカトリックの文書によると、以下のように書かれています。

「ミサの犠牲は、十字架の犠牲の真の成就、すなわち、歴史上でただ一度だけ成就された十字架の犠牲は、秘蹟という形式の中に秘義として現実化されている。」

(トリエント公会議の信仰問答より)

問 80 の最後は「したがって、ミサは根本的に、ただ一回限りのイエス・キリストの犠牲と苦難の完全な否定なのであります」という厳しいことばでもって締め括られます。毎回心血注いで行なっている儀式が、かえって主イエスの犠牲を無に帰してしまっていたとしたら、残念でなりません。

結論として、このような聖餐理解の比較がもたらす意義とは、主イエスの犠牲の一回性、絶対性、無双性をどこまでも理解し、その恵みにあずかっている幸いを覚えるところにあるでしょう。2000 年以上前にささげられた十字架の犠牲は、過去、現在、未来、すべての信者にとって有効なのです。私／あなたのためにも主の血潮は確かに流されたのです。